

逍遙館長的ところ

「歴史の選択は紙一重、のところ」

5月17日 逍遙^{逍遙}

前々回にご紹介した「四侯会議」が開催されていた最中の、今日5月17日(1867年)は、上田藩(現長野県)藩士の赤松小三郎という人物が、四侯会議メンバーの松平春嶽に、普通選挙による議会政治を日本で初めて提言した日です。彼は、同様の提言を、島津久光と幕府にも提出しています。

そもそもこの赤松という人物、勝海舟に従って長崎海軍伝習所に赴き、また江戸や大阪での公務等を通じて、英語や騎兵術等を学び、京都の薩摩藩邸で英国式兵学を開塾(東郷平八郎も門下生の一人)しました。当時、薩摩藩が武力倒幕に傾いていくタイミングの中にあって、赤松は幕府と薩摩藩の融和をギリギリまで試みましたが、結局、赤松の暗殺(実行したのは、赤松の門下生の薩摩藩士・中村半次郎ら)という形で終止符が打たれました。

逍遙館長的に思うのは、刻一刻と変わる時代背景と、偶々そのタイミングでその場面に関わった先人達との、全く偶然の巡り合わせの如何が、その後の歴史の選択を大きく左右したという、歴史の醸し出す不可思議さでしょうか。

◎ 次回の予定「あるべきリーダーの条件とは、のところ」

